

日本語力の維持・向上のために

米国での生活が長くなると、子どもの日本語力は徐々に低下する傾向があります。もちろん渡米時期や在米期間、生活環境などの条件によって個人差があり、中学生や高校生になってから海外生活を始めた子どもの場合には、日本語力は大きく低下することはない、むしろ英語力が伸び悩むという傾向も目立ちます。一方、米国で生まれたり、幼少時に米国での生活を始めた子どもの場合には、両親が日本語話者であっても、年齢相応の日本語力が定着していないというケースもあります。また、両親のいずれかが日本語話者でない場合には、日本語での会話も難しいという子どももいます。このように米国で暮らす子どもの日本語力はさまざまですが、日本語力の低下を食い止め、さらに向上させるためにはどうすればよいでしょうか。

そのためには日本語に触れる時間を増やすことが必要です。まず、家庭での会話は日本語で行うことが大切です。母親のみが日本語話者の場合には、母親とは必ず日本語で話す習慣をつけましょう。また、日本語のテレビ番組や映画、アニメーションなどを観たり、日本語の本を読んだりするのもよいでしょう。また、補習校や日本語学校に通学することもお勧めします。週1回ではありますが、日本語での学習を継続している子どもは、在米期間が長くても学年相応かそれに準ずる日本語力を維持しているケースが目立ちます。

また、夏休みなど長期の休みを利用して集中的に日本語に触れるという方法もあります。その一つが日本の学校での体験入学です。日本語での学習のみならず、同年代の子どもと接することができますし、日本の学校生活そのものを体験できるのがメリットです。ただし、体験入学では日本の学校の通常授業を受けますので、学年相応かそれに準ずる日本語力、特に読み書きの力がないと授業についていけませんし、会話ができませんとクラスメートともなじみません。楽しく過ごせないで日本語学習意欲を失うこともあるので注意が必要です。

ほかに、サマーキャンプのような体験型の学習プログラムもあります。これに

日本語の学習意欲を芽生えさせる

～「サマーキャンプ in ぎふ」の特長

米日教育交流協議会 (UJEEC) ・代表
丹羽筆人

は米国内で実施されるものと日本で実施されるものがあります。前者は日系の学校や団体が主催でも米国の施設を使うために英語を使う機会が多くなってしまふケースもあります。後者には海外在住者専用というものは少なく、日本語の読み書きの力はさほど必要がないものの、会話がかなり流暢でないと、一緒に参加する子どもたちについていけないということもあります。

米日教育交流協議会の「サマーキャンプ in ぎふ」は、日本で実施する海外在住者専用の日本語・日本文化体験学習プログラムです。さまざまな体験を通して楽しみながら日本語に触れることができ、日本語の学習意欲が芽生えると好評です。

サマーキャンプ参加者の様子

「サマーキャンプ in ぎふ」は2006年から8年間にわたり、7月上旬から8月初旬に10日間から2週間のプログラムを年2回実施してきました。残念ながら2011年と2013年は1回のみしか実施できませんでしたが、これまで実施した14回にのべ144人が参加しました。

参加者の多くは米国生まれや海外生活が長く日本での在学期間の短い子どもですが、大多数は両親またはいずれかが日本語話者です。ただし、子どもの日本語力は個人によってさまざまであり、日本語での会話力については家庭での日本語の使用頻度が影響を及ぼしています。両親がともに日本語話者ではなくても、母親または父親と日本語で会話している家庭の子どもは流暢に会話できますが、親が日本語話者でも子どもと英語で会話していたり、親の日本語力が高くなかったりする場合には、日本語の会話に支障がある子どもも目立ちます。

読んだり書いたりすることについて

学年相応の日本語力のある子どもは少ないのですが、子どもの実力の差には補習校通学の有無や通学年数、また日本での生活年数・時期などが影響しています。まず、補習校通学経験のない子どもの場合、読み書きはほとんどできないケースが目立ちます。一方、補習校に幼稚園もしくは小学1年生から継続して通学している場合には、学年相応もしくはそれに準ずる力があります。しかし、補習校をやめた場合には、やめたときの学年より低い力にとどまってしまう。また、日本での生活経験があり、特に日本の学校に通学した経験を持つ場合、読み書きの力が優れている子どもが目立ちます。特に小学校低学年の3年間を日本の学校で学んだ場合には、文法的な誤りの少ない文を書くことのできる子どもが目立ちます。

「サマーキャンプ in ぎふ」では、このように多様な日本語力の子どもを受け入れてきましたが、日本語が不得意でも、子どもたちが楽しみながら学ぶことができ、学習意欲が芽生えるように工夫をしています。

一つ目は、食事や自由時間以外では、すべて日本語で活動するという事です。すべての活動の説明を日本語で行いますし、参加者にも日本語で話す機会がたくさんあります。キャンプ期間中に少しでも多く日本語に接することにより、日本語を身近に感じてもらうためです。

二つ目は、参加者の間では英語で会話することを認めているということです。食事や自由時間はもちろんですが、活動時間においても日本語力の乏しい子どものフォローをするためや、指導者の重要な指示を伝えるためには英語を使う必要があります。活動の効果を高める

ため、安全を確保するため、また子どもたちがフラストレーションを貯めないための配慮です。

今年度のプログラムについて

今年度の「サマーキャンプ in ぎふ」は、今まで8年間にわたって活動拠点としてきた岐阜県揖斐(いび)郡揖斐川町に加え、山県(やまがた)市の山間部でも実施します。

揖斐川町で実施する第1期は、従来通り、町立小中学校および地元の県立高校での学校体験を組み込んでいます。ただし、授業内容を理解することを主たる目的とはせず、同年代の子どもたちとの交流を通して、無理なく学校生活を体感できるようにしています。また、禅宗寺院での1泊2日でのミニ修行も行い、座禅や読経を体験したり、食事の作法を学んだりもします。

新たに拠点に加えた山県市で実施する第2期では、昔の山間部の人々の暮らしを体験することによって、日本の良さを実感してもらえるようにしています。例えば、築100年の古民家で寝泊まりし、かまどでご飯を炊いたり、五右衛門風呂に入ったりします。また、地元の子どもたちとともに、手作りいかだでの川下りを体験したりもします。

どちらの期間も、日本語と日本文化をたっぷり味わうことができますし、楽しく有意義な夏を過ごすことができるでしょう。

「サマーキャンプ in ぎふ 2014」は、参加者の申し込みを受け付けています。詳細は、米日教育交流協議会のウェブサイト www.ujeeec.org をご覧ください。



同年代と楽しく交流できる学校体験



寺院では座禅、読経、食事作法も学ぶ



古民家ではかまどで炊飯



手作りいかだで清流を下る

執筆者のプロフィール: 河合塾で十数年間にわたり、大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌「栄冠めざして」などの編集に携わるとともに、大学受験科クラス担任として多くの塾生を大学合格に導いた。また、現役高校生や保護者対象の進学講演も多数行った。一方、米国・英国大学進学や海外サマーセミナーなどの国際的企画も担当。1999年に米国移住後は、CA、NJ、NY、MI州の補習校・学習塾講師を務めた。2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。さらに、河合塾海外帰国生コース北米事務所アドバイザーとして帰国生大学入試情報提供と進学相談も担当し、北米各地での進学講演も行っている。また、文京学院大学女子中学校・高等学校北米事務所アドバイザー、名古屋国際中学校・高等学校アドミッションオフィサー北米地域担当、デトロイトリンゴ会補習授業校講師(教務主任兼進路指導担当)も務めている。

◆米日教育交流協議会(UJEEC)

Phone: 248-346-3818 Website: <http://www.ujeeec.org>